

文献紹介

「セザンヌの芸術」

Kurt Badt, *Kunst Cézannes*, Prestel Verlag, München, 1956; English edition: *The Art of Cézanne*. Faber & Faber, London, 1961.

「セザンヌの芸術」とはいっても本書はセザンヌ芸術のすべてを細大もろさず網羅した総合的な研究では決していない。このことは目次を一瞥すれば明らかであろう。すなわち本書は序章を除いて全5章よりなり、第1章が「セザンヌの水彩技術」、以下「カルタ遊びをする人々」「セザンヌの象徴主義と彼の芸術における人間的性格」「Réalisation の問題」そして終章が「セザンヌの歴史的位置および意義」となっている。このような一見相互の脈絡を欠いた独立的なテーマを抽出することによってセザンヌ芸術に関する一書を構成したところにすでに著者独自の的方法論的な特色がうかがえるが、これは芸術研究に関する彼の次のような考え方にもとづくものである。すなわちバットによれば芸術——芸術一般であれ特定の個人の芸術であれ——の本質にふれるためには、たとえばしばしば行なわれるような時代的（伝記的）な側面にそった「直線的な思考過程」(ein gradliniger Fortgang im Denken) によるよりも、むしろ芸術の本質をひとつの円の中心とみて、その円周上の異った部分にしかるべきアプローチの拠点を求めるべきである。また逆に言えばこのようないくつかの点の軌跡が結果的には芸術の本質を中心とするひとつの円を構成することが要請されるわけである。そしてこのような要請をみたすために著者バットが選び出した中心へのアプローチの拠点がすなわち上に示した5章なのである。

しかもこれらのそれぞれに異った視点をそなえた各章は、単に標題に示されたような問題のみを考察するのではなく、これを軸としながらそれに附随するいわば衛星的な問題をも豊富にとりあげ、これらにもゆきとどいた照明を与えているのであって、これにより本書はセザンヌの単なる特殊研究とは違った幅の広さと奥行とをえているのである。例えば第1章の「セザンヌの水彩技術」では彼の水彩を「セザンヌの精神の最も純粋な体現」とみてその造形的分析を試みる一方、それが本質的には「没対象的」(gegenstandlos) である点に着目して音

楽との親近性を指摘するのであるが、その際もこれにからませて、すでにボードレールやドラクロワ等が看取していた音楽と絵画との類縁性について一般的な幅広い考察を展開してゆくのである。また同じ章で、セザンヌの水彩——油彩も同様であるが——において常に重要な美的効果を示す青について、単に空気の厚みを感じさせるための、すなわち空気遠近法的な目的からこの色彩に「過度に」頼った印象主義者達（バットによればセザンヌは「一度たりとも印象主義者だったことはなかった」）の場合と峻別して、セザンヌの青のもつ独自の意義を解明するのであるが、その際もこれに関連して絵画のみならず文学にあらわれた青について古代から近代に至るまで幅広く渉猟し、ひとつの興味深い「青の歴史」ともいうべきものを構成している。そしてこれによってセザンヌ的な青の特性が広い歴史的な視野の内により鮮明に浮き彫りされることにもなるのである。しかしながら本書の中でも著者が最も力をそそぎ、かつユニークな解釈がみられるのは、第2、第3章のセザンヌ芸術における人間的（運命的）要素ないしは象徴的性格の解明においてである。著者は程度の差こそあれセザンヌ芸術全般にわたって支配的なあの静物画的な不動性、人をよせつけぬある種の冷やかさ、一見感動性に乏しい硬ばった画面の表情等をもって、彼の芸術を「生に迂遠な」(lebensfern) あるいは「人間不在の」(aussermenschlich) 芸術と規定する F. Novotny や、彼と同様、セザンヌの芸術に「視覚的経験に対する極度の精神的情的無関心性」(ein Zustand äusserster Teilnahmlosigkeit des Geistes und der Seele an den Erlebnissen des Auges) を看取し、その「純粋性」、すなわち此岸的、人間的な精神性の欠如（換言すれば「感情移入の拒絶」(Ein Versagen der Einfühlung) を指摘する H. Sedlmayr 等に反論し、彼の芸術の総体は、19世紀の偉大な芸術の多くがそうであったように、一人の人間の「偉大なる告白」であり、「創造するものの苦悩とその超克」の歴史であるという立場をとる。そしてその正統性を裏づける

ため、また同時にセザンヌの芸術を「純粹」ないしは「絶対」絵画とみなす前記 Novotny や Sedlmayr 等に対する反証の論拠として取り上げたのが「カルタ遊びをする人々」であり、「マルディ・グラ」(Mardi Gras) であり、あるいはまた「数珠をもった老婆」等々である。特に前二者の作品を分析するに当たって、著者はセザンヌが20才の時友人のゾラに送った一通の手紙とその余白に描かれたデッサンを重視して、これより当時のセザンヌの精神状況を解明し、それがいかに上述のような後年の諸作品に反映しているかを追究しているが、その際目立つのはフロイト(本書には直接の言及はないが、彼のレオナルドの「聖アンナ」等の解釈が著者の発想法に多かれ少なかれ影響を及ぼしていることは明らかである)、C. G. ユング等を直接間接に援用しながら、上記のようなセザンヌの作品に精神分析的な解釈(ここで若いセザンヌと彼の父親およびゾラとの人間関係が決定的に重要な意味をもって来る)を加えていることである。これはおそらく従来のセザンヌ文献には求められない本書の新しさのひとつであり、この部分だけでも本書のユニークな価値を十分に保証しているといっても決して過言ではないだろう。(ただしそれだけに著者の解釈をめぐって様々な異論の出そうなどころでもあるが)。

第4章の「Réalisation の問題」においても著者の努力はセザンヌが対芸術、対自然との闘いの中からいかにして自我、換言すれば彼をかこむ一切の現象(外面)的世界に内在する「永続的な一者(das Ein, das bleibt)」に対する彼独自の立場」を造形的に réaliser していったかの究明にそそがれている。

第5章の「セザンヌの歴史的 position と意義」においてはセザンヌとブッサン、ドラクロワ、クールベ、マネ、ピサロ等の影響関係を中心としながら、彼の芸術がこれらの先人および同時代人達の芸術の「綜合」(折衷ではない)であると同時に、「ひとつの時代の終末」でもあり、その

「存在(Sein)に対する余りにも深く偉大な観照」ゆえに現代の芸術家ないしは流派にとって、その遺産を全的に継承することは不可能であったことを結論としている。以上本書を全体としてながめた場合、ここにはセザンヌ芸術に内在する複雑な問題性がそのまま現われているようであるが、個々の問題に示された著者の見解に対する賛否は別として、このような問題を提起し、これらを執ように追究したこと自体にすでに、ひとつの試みとしての本書の大きな意義があるといつてよいであろう。

なお、著者の Kurt Badt は1890年ベルリンの生まれ、ベルリン、ミュンヘン等で歴史、美術史、哲学等を研究一時ロンドンのワールブルク研究所で活動したこともあるが教壇にはたまた free lance として著述に専念している。著書には本書の他《Modell und Maler von Jan Vermeer》(1961)、《Die Farbenlehre van Goghs》(1961)、《Raumphantasien und Raumillusionen》(1963)、《Eugène Delacroix》(1965) 等がある。

(千足伸行)